THINK × ACT
KANSAI
UNIVERSITY

CTL Newsletter

Kansai University Center for Teaching and Learning

関西大学 教育開発支援センター
ニューズレター

June 2013
vol. 12

インキュベーターとしてのCTL

教育開発支援センター長 田中 俊也

関西大学ほどの大規模な私立大学で、新しい教育的な取り組みを全学的な合意を得て始めることは極めて困難である。勢い法人や教学コーナーからのトップダウン的声掛けや、志のある部署からの突発的提案という形で踏み出してしまうことになりかねない。

本学では、そうした、学部の枠を超えた全学的な教育的取り組みに責任を負う部署として2008年に教育推進部が設置され、その中でも、そうした新たな取り組みを育てていく部門として教育開発支援センター（CTL）が存在する。ここでは必要に応じて「プロジェクト」を立ち上げ実施することがミッションの1つとして明記されている。いわば新たな教育的取り組みの試行的実験の場の設定であり、その卵を大切に温めて孵化させることをミッションとする。孵化した後は、関西大学の新たな部署の1つとして独立して機能していただければいいのであって、いつまでもCTLが抱え、その影響力を誇示しようなどという覇権主義的発想は一切持たない。孵化器（インキュベーター）の役割が主であって、それが関西大学の発展に寄与することを強く確信している。

一昨年来、CTL内に、全学ICT活用推進会議、ライティング支援プロジェクト、学生の教育力活用プロジェクト、学習環境デザインプロジェクト等を立て続けに立ち上げてきた。これらはそれぞれ、高等教育機関としての関西大学の教育にとって欠くことのできない、ICT活用、書く力の育成、学生自身の持つ教育力活用、授業の教室以外での学びの空間のデザインという、きわめて重要な課題に対応するプロジェクトであり、それぞれの運営組織がやがては自律的に動けるようになることが期待されている。

親鳥は派手なパフォーマンスもなくじっとしているかにみえるが、卵を孵化させる、という重要な仕事を担っているのである。そういう仕事を「ミッション」とした部署を創設した関西大学はきわめて健全な未来志向の大学として胸を張れるものである。インキュベーターなき組織には衰退の道しか存在しない。

教育開発支援センター　2013年度　プロジェクト紹介

学生の教育力活用プロジェクト

学生の教育力活用プロジェクトでは、学生の教育力を活用した学習・教育支援のための体制を整備することを目的としています。本学では、学生が学習・教育効果を高めるために活動しています。教員の教授を支えるTA（ティーチングアシスタント）制度、初年次科目における学生の学びをサポート（ディスカッションのファシリテータ、プレゼンのロールモデル等）するLA（ラーニングアシスタント）制度、担任者が授業運営において行わねばならない軽微な用務の補助する授業支援SA（スチューデントアシスタント）制度があります。これらの制度を主軸に、研修を実施したり、その教材を開発するなどして、学生の教育力を活用した学習・教育支援のための体制整備をしています。

1．TA制度の全学展開に伴う規程策定

関西大学ではこれまでTA制度を運用していたが、各学部によって運営されていたため全学的な規程を策定していなかった。そこで今年度は全学的にTA制度を展開するため、TA規程、ガイドラインを策定した。これにより全学的なTA制度の運営をすることがなされ、全学的なTA研修を実施する運びとなった。

2．TAハンドブックの作成

TAハンドブックを作成した。TAハンドブックは、3部構成となっている。第1部では、TA制度の理念、具体的なTAとしての振る舞いについて記載している。第2部では、TAの業務内容の進行や業務内容に合わせて出てくる疑問や戸惑いに対する解決策としてTIPS集、TA通信を載せた。第三部では、諸規定・ガイドラインを提示した。

TIPS集に関しては、これまでのTA研修でTAから寄せられた課題を中心に取り上げ、それに対する解決策をTA有志2名とプロジェクトメンバーで検討、作成をした。

3．TA研修の実施

全学部のTAを対象に、TA研修を実施している。今年度は、9月と3月に実施した。TA研修では、高等教育の現状とその課題についてミニレクチャーを行い、その後、TA同士による意見交換会を実施し、業務時の課題解決の方法を共有し合うようにしている。研修を通じて、関西大学のTA制度について理解し、TAとしての役割を認識する機会としている。

4．TA通信の発行

2011年よりTA通信を発行しており、今年度は第9、10、11号を発行した。TA通信では、TAの活動内容、活動による効果、TAが活動を通して学んだこと等について記載している。これまでは、初年次教育、理工系演習、フィールドワーク、外国語等においてのTA通信が発行されている。

通信はホームページ
（http://www.kansai-u.ac.jp/ctl/outline/ta05.html）で公開している。

（教育推進部　岩﨑千晶）

アクティブ・ラーニングプロジェクト

教育開発支援センター（以下、CTL）では本学にアクティブ・ラーニングが浸透することを願って活動を展開しています。研究偏重主義への反省から大学本来の教育機能が見直されたのが初期のFDですが、アメリカでは1990年代後半より教育から学習（teachingからlearning／教師から学生）へとFD活動の重点をシフトさせました。CTLもこのパラダイムシフトを重要なことであると認識し、日々の教育実践のみならず、他に機会を見つけては学生の学習が主体的、活動的なものになるような知見や情報の提供・共有あるいは創出に尽力しています。平成21年度には大学教育・学生支援推進事業【テーマA】大学教育推進プログラムに『三者協働型アクティブ・ラーニングの展開−大学院生スタッフとともに進化する“How to Learn”への誘い−』が採択されました。プログラム終了後も同様の活動を続けています。以下に紹介するのは2012年度において実践したactive learningを学内に広く展開するための組織的な取り組みです。

2012年4月21日にFD Café（新任教員研修会）を開店（開催）しました。同cafeではactive learningをクラスの中に展開・維持継続するために有用であると思われる各種メソッドやスキルを擬似的に体験してもらっています。グループワークをアクティブにするためにどのようなグルーピングや自己紹介が有効であるのか、グループでのダイアロークを活性化するためにはどのような仕掛けが考えられるのか、ダイアローグの内容を可視的にまとめるためにはどのようなツールがあるのか、そのようなことを踏まえて、ミラーリングを用いた自己紹介やWorld Café、mind mapなどを実際に体験していただきました。このcafeでの体験をご自身の授業に反映されている教員もいるようです。

同年11月7日に第8回FDフォーラムを開催しました。講師に東京工芸大学芸術学部教授の大島武先生をお招きし、『コミュニケーション再考−分かりやすい「伝え方」−』という演目で講演していただきました。Active Learningを展開するためには、学生のみならず教師も授業に対してアクティブにならなければなりません。それを学生とのコミュニケーションに反映させるためにはどうしたらよいのか、コミュニケーションやプレゼンテーションなどのパフォーマンス研究をご専門とされ、ベスト・エデュケーター・オブ・ザ・イヤー最優秀賞を受賞された経験のある大島氏から学ぼうと考えて講演を依頼しました。CTL発行のNewsletterにも掲載したように、このフォーラムは好評を博しました。

同年10月5日を皮切りに、翌年1月11日の最終回まで、都合5回のランチョンセミナーを開催しました（詳細はNewsletterに掲載済み）。この新シリーズは「グループワークをはじめませんか？」というタイトルのもと、アクティブ・ラーニングを展開するために、PBL型授業では定番となっているグループワークに関する情報・知見・アイデアを提供し、共有することを目的としたものです。グループワークを実施するための準備作業やグループワークを開始してから留意すべきこと、その他、グループワークをより効果的なものにするための工夫、アイデアなどを提供者と参加者とで十分に共有することができました。こちらも毎回のセミナー終了後のアンケート結果から有用であるとの評価を頂きました。

（教育推進部　三浦真琴）

ライティング支援プロジェクト

1）CTLライティング支援プロジェクトの設立

2010年度採択の大学教育・学生支援推進事業大学教育推進プログラム「文学士を実質化する〈学びの環境リンク〉―卒論ラボ・スケール・カードの有機的な連携による“気づき”を促す仕組み作り」が2011年度で打ち切りとなったのに伴い、文学部でのライティング支援の取組を全学に展開していくための母体として、2012年4月に「ライティング支援プロジェクト」を設立し、活動を開始した。これに伴い、文学部で運営されていた「卒論ラボ」を「ライティングラボ」と名称変更のうえ、10月より業務を移管した。

2）大学間連携共同教育推進事業の採択

新たな活動予算を獲得するために、ライティング支援プロジェクトが中心となり、文部科学省大学間連携共同教育推進事業に、津田塾大学との連携取組「〈考え、表現し、発信する力〉を培うライティング／キャリア支援」を申請し、採択された。ライティング支援プロジェクトは、関西大学側の事業の取組主体となり、2012年10月以降、新たな活動を展開した。

3）2012年10月以降の主な活動

①**ライティングラボ：**ライティングラボにおけるライティング支援事業を従来どおり継続すると共に、新事業の趣旨に合致した支援内容の充実を図った。

- 10月～ 3月まで、TAによる個人アドヴァイスを実施し、延べ163名が利用した。
- 10月～1月まで、「文章表現ワンポイント講座」を計10回実施した。
- 1月18日に、朝日新聞社との連携講演会「書きたいことは、読みたいことですか？」を開催した。

②**eポートフォリオ開発：**ライティング支援に特化した新しいeポートフォリオシステムの開発に向け、大規模な調査を実施した。

③**教職員合同FD/SD研修会：**2012年11月29-30日および2013年3月17日に、津田塾大学と合同で教職員合同FD/SD研修会を実施した。

④**シンポジウム：**2013年3月16日に関西大学にて津田塾大学との共同主催シンポジウム「ライティングセンター　日本の現状と課題」を実施した。

（文学部　中澤 務）

プロジェクト「全学ICT活用推進会議」

2012年度に新規に立ち上がったプロジェクト「全学ICT活用推進会議」は、教育推進部の山本敏幸をリーダーとして、ITセンター副所長、学長補佐1名、学部所属の教員2名、学事局長、学術情報事務局次長、授業支援グループ長からなる組織である。本プロジェクトは、2010年度に「eラーニング/eポートフォリオ活用推進ワーキンググループ」が学長に提出した報告書を受けて、学長が本学におけるICTを活用した教育を推進するために提案した内容をもとに設立された。本プロジェクトのミッションは、日本の大学において、デファクトスタンダードとなるような大規模大学におけるIT戦略、関大モデルを策定し、普及させることにある。

2010年度に「eラーニング/eポートフォリオ活用推進ワーキンググループ」が学長に提出した報告書に記載されている活動内容が多様、広範にわたるため、2012年度は本プロジェクトの責任領域と活動領域の設定に終始した。以下に、活動領域に含まれる大まかな項目を紹介する。

1. 対外的な本学の立場の明確化と対応策：
   大学 e ラーニング協議会、Sakai Foundation、JOCW など。
2. 授業内で活用するインタラクティブ学習ツール：
   クリッカー、「S-maqs(エス・マックス)」、スマートフォン等
3. オンラインで補講（e- ラーニングによる補講運用の可能性）
4. 「授業支援システム」、「CEAS/Sakai システム」など、教育や学習を支援するシステムの運用支援体制と位置づけ
5. 講義配信システムの位置づけ
6. テレビ会議システムの活用方法
7. 教育・学習用 e ラーニングコンテンツ制作の方向性
8. 公開用コンテンツ（JOCW，iTunesU, iBooks Author）の本学での取り組みと方向性
9. 本学における公式な e ポートフォリオシステムの位置づけ
10. 本プロジェクトの責任体制
11. 本プロジェクトの議決範囲

以上の項目について、過去の経緯と現状の問題点について、各メンバーが持っている情報を出し合い、可視化し、情報共有をおこなった。こういった活動を通して、本来本プロジェクトが責任をもって取り扱うべき領域を明確化することができた。

（教育推進部　山本敏幸）

プロジェクト「ICT活用授業の普及活動」

本プロジェクトは2011年度より始まったプロジェクトで、教育推進部教員2名と授業支援グループ職員4名からなる。プロジェクト期間は3年間で、本プロジェクトの使命は、これまでに整備・導入されたアクティブ・ラーニングを促進する教育支援用ICT機器やシステム、及び、授業時間外学習を促進するためのインフラについて、全学レベルで啓蒙・普及をおこなうことである。これらの使命を実現するため、2012年度は次の活動を行ってきた。

本プロジェクトの活動内容

1. 授業支援用 ICT 機器やシステム等の普及のためのワークショップ・講習会の開催（新任教員研修会、ランチョンセミナー、FD カフェにて実施）
2. 授業支援用 ICT 機器各種の簡易利用マニュアルの作成と配布（授業支援システム・CEAS/Sakai システムのスターターマニュアルを作成）
3. 教材コンテンツ作成のためのアドバイス（尚文館マルチメディア作成スタッフとコンテンツについての勉強会開催、留学生別科 e ポートフォリオ用コンテンツ作成のアドバイス、留学生別科シンポジウムでテキストメッセージ付きクリッカーを活用した視聴者参加型のシンポジウムの実施）

2013年度は、コラボレーションコモンズのICTエリアを中心に、受講生をも対象に、アカデミックなICTリテラシー、スマートフォンリテラシーの普及・啓蒙活動を行っていく。

（教育推進部　山本敏幸）

学習環境デザインプロジェクト

学習環境デザインプロジェクトは、2013年度から発足しました。このプロジェクトでは、学習・教育のための学習環境デザインの構築をしていくことを目的としております。具体的には、教室やその他学習施設における設備整備や運営、ならびに教室に配置する機材や什器等の検討をし、学習環境のデザインを行います。

（教育推進部　岩﨑千晶）

国立台湾大学　教育開発支援センター（CTLD）メンバー訪問

2013年4月23日に、本学の協定校でもある台湾の国立台湾大学（NTU）から、本学の教育開発支援センター（CTL）とほぼ同じようなミッションを持つ機関、Center for Teaching and Learning Development（CTLD）からの視察団をお迎えしました。7名の、大部分がアメリカで学位をとられた精鋭の研究者のみなさんです。

双方のセンター長同士で事前に入念な打ち合わせをして、当方では極力関西大学のCTLの業務内容を理解いただけるよう準備しました。それに加えて、協定校であることを踏まえて、関西大学についてできるだけご理解いただけるよう、国際部とも連携してメニューを用意しました。

当日はまず、NTUのCTLDと本学のCTLの業務内容についての詳細な議論の場を設けました。その後、国際部のご協力を得て、本学に留学生として来ているNTUの学生を含めた懇談会、昼食会を経て、国際部長への表敬訪問をしていただきました。さらにその後、新たにできたコラボレーションコモンズの紹介を含む学内ミニ・ツアーをしていただき、その後は場所を南千里の留学生別科に移し、その施設・教育内容等の視察もしていただきました。千里山キャンパスでは中国からの大学院留学生に通訳を依頼し、スムーズなコミュニケーションを実現することができました。

帰国後、先方の引率責任者の教務長・莊榮輝先生から丁寧な礼状をいただき、先方にとって有意義な関西大学への訪問であったことを確信しました。学内各部署の先生方・事務の皆様のご協力に心から感謝している次第です。

（教育開発支援センター長　田中俊也）

国立台湾大学からの訪問団と留学生、国際部とCTLスタッフ

フォーラム・セミナー報告

「スタディスキルゼミ」・「知のナヴィゲーター」ワークショップを開催しました

日時：3月29日（金）15：00〜16：30
場所：第２学舎　２号館　C301教室

3月29日に「スタディスキルゼミ」・「知のナヴィゲーター」を既にご担当いただいている専任教員・非常勤講師の方々、及び、新たにご担当いただく専任教員・非常勤講師を対象に情報共有を目的とした研修をおこないました。参加者は11名でした。以下の内容で研修をおこないました。

1. コラボレーションコモンズに貸し出し用に配置されたiPadを使い、参加者各自に学内wifiネットワーク（kuwifi）を授業で活用していただくべく、ネットワーク接続を体験していただきました。
2. ICTを活用したアクティブ・ラーニングの一例として、kuwifiを活用したクリッカー（Clica）-アンケート結果をグラフで可視化、理解度確認ボタン、テキストによるコメント記述有り- を紹介し、使い勝手を体験していただきました。
3. 授業支援システム、CEAS等の授業支援ツールや授業支援ステーションの提供する授業支援の各種サービスについて説明し、既にお使いの先生方には授業での活用方法についてお話しいただきました。
4. アクティブ・ラーニングについて、三浦先生より、TBLによるPBL手法を活用した授業について説明してもらいました。
5. コラボレーションコモンズ及びライティングラボについて、岩﨑先生より紹介がありました。

最後に、コラボレーションコモンズの見学説明会をおこないました。

（教育推進部　山本敏幸）

今期もFD Caféを開店しました

日時：4月20日（土）13：00〜16：30
場所：第２学舎　２号館　C301教室

4月20日(土)、“FD Café”（新任教員研修会）を開催しました。新年度開始早々の気忙しい時期でありましたが、19名の参加を得ました。一昨年度より、開店時期を4月の下旬辺りにセッティングしておりますが、それは新任校での授業を数回経てからの方がリアリティに満ちた対話ができると考えたからです。

FD Café は次のようなコンセプトに導かれて営業しています。すなわち、Faculty〔大学教員集団〕が教育改善のために必要なこと〔能力・資質と限定的には書かない・言わない〕を Develop〔開発・伸長〕するために、まずは教員間の意思の疎通・共有が求められるが、そのためには“Free Dialogue”が不可欠であり、それは私たちにとってなくてはならぬ“Food & Drink”のようなものである、折角、口にする機会に恵まれるのなら、美味しく楽しく味わいたい、そんな場を何処かに持ちたい、ということです。ここに自分たちの所属する組織がどんなすがたであってほしいのか、私たちはそこにどれだけ関与できるのか、そのような“Future Design”を描き、その内容を伝え合う機会もそっと織り込みたいと願っています。

例年は active learning を展開する上で有効と考えられる group work に関わる手法、メソッド〔アイスブレイクを兼ねたグルーピング、ミラーリングを用いた自己紹介、グループごとのダイアログ、グループ間の意見・情報を交換・共有するための World Café など）を擬似的に体験していただくメニューを用意しておりますが、今回は CTL が推進する各種プロジェクトの内容をご理解いただけるようにメニューに変更を加えました。

第一部ではアイスブレイクとしてクリッカー（オーディエンスレスポンスシステム：ARS）の利用体験ののち、ICT を活用した教育実践の紹介や授業支援の説明をしました。参加者からは「授業支援システムや CEAS 等の機能の説明が役に立った」「クリッカー等のツールについて理解が深まった」「なかなかマニュアルを読む機会のないシステムの活用方法を丁寧に教えてもらえた」との評価をいただきました。次年度も同種同様のコンテンツをメニューの定番にしたいと思います。

第二部ではグループワークへの誘いと題して、PBL 型授業が大学において有用である理由、ならびにその実践において有効であると思われるメソッドやツールを紹介しました。「グループワーク手法、ツールを知ることができ、有意義だった」「PBL について改めて学べた」とは参加者の感想です。

第三部では、TA の全学的運用、ライティングラボ、コラボレーションコモンズなど、CTL の新しい取り組みを紹介しました。「TA 制度について知ることができてよかった」「様々なシステムの運用について聞けたのがよかった」などのご感想をいただきました。また取り組みやシステムの紹介のあとは実際にコラボレーションコモンズに足をお運びいただき、そのまま“Food & Drink”の会場へとご案内致しました。

上記のほか、参加者の方々からは「関西大学独自の具体的な制度や施設の活用法がわかった」「ツールや授業支援のしくみの紹介・実演があってよかった」「発言しやすい雰囲気だった」「気軽に質問できたよかった」などの評価を頂きましたが、改善すべき点や要望も頂戴致しました。「アクティブ・ラーニング手法やツールを体験しながら知りたくなりました」「先輩に新人時の話、経験談をしてもらいたい」というご意見については、昨年度までに実施していたことなので、これを復活させることについて前向きに検討したいと思います。「情報量が多かった」、「時間帯を二つに分けると参加者が増えるかもしれません」、「時間の配分を工夫してほしい」というご指摘に関しては、これを真摯に受けとめ、克服する方途を考えた上で次回に反映させたいと思います。

「大講義の効果的な運営方法」「シラバスの作成の仕方」「実践的な教育ノウハウ」について、これを知りたくなった、あるいはテーマとして取り上げてほしいという要望がありました。Summer Café あるいは FD フォーラム、もしくはランチョンセミナーなどにおいて、その要望にお応えできるようにしたいと考えています。

今回、Café に来店くださった方が、次回の Café やフォーラムのみならず、来年度の FD Café に alumni として再訪されることを心待ちにしております。また、今回、ゆえあって参加できなかった方々も、どうぞ今後のイベントに奮ってご参加くださいますようお願い申し上げます。

（教育推進部　三浦真琴）

Learning Assistant
LA活動報告

海外の国際学会でのLAの活躍

【写真１】

今年3月14日から16日まで、台湾台北市南港地区にあるAcademia Sinica（国立の総合研究施設）で、TELDAP 2013が開催されました。本学LAの政策創造学部当時2年生の中村薫平さん、経済学部当時3年生の丸山遥さん、文学部当時1年生の鈴木香帆さんの3名が国際学会運営スタッフとしてインターンシップを体験してきました。この学会は、世界各国の大学から250人ぐらいの参加者のある学会で、今回は10年目の開催でした。**【写真1】**は学会HPよりバナーと開会式の様子です。

【写真2】座長補佐業務中のLA

LAのインターンシップは昨年度から行っています。3名のLAたちは現地の学会運営担当のスタッフと共に、学会開催日前日には運営スタッフ研修、会場設営、AV機器の操作確認を行い、学会開催日からは受付カウンターでの参加登録業務、学会コンシェルジュ業務、セッション座長の補佐業務等を経験してきました。**【写真2】**は座長補佐業務中のLAたちです。

【写真3】ポスターセッションで中村薫平さんが発表

学会運営スタッフ業務に加え、中村薫平さんが本学のLAの活動とスタディスキルゼミ授業でのアクティブラーニングの涵養についてポスター発表も行いました。**【写真3】**

閉会式では、3名のLAは学会でのグローバルな活動に貢献を讃え、Simon C. Lin学会委員長より感謝状をいただきました。**【写真4】**

本学のLAたちは、これまでの留学経験を通して培ったグローバル・コミュニケーション能力を、国際メンバーにより構成された学会運営スタッフチームの中で十二分に発揮してくれました。

本学の長期ビジョン：“グローバル社会で「考動」する関大人を育成”に関連する活動の一環の実証例（アーティファクト）としてご報告いたします。

【写真４】

注）【写真１～４】は TELDAP公式ホームページ（http://collab.teldap.tw）より許可を得て掲載しています。

（教育推進部　山本敏幸）

From CTL事務局

こちらへお世話になって約2ヵ月がたちました。当初、聞きなれないカタカナや英語のオンパレードで、最初何のことがわからない状態でしたが、CTLの先生や職員の方々といろいろお話を聞いて、状況を知ることができました。このCTLニュースレターは、記事としてはわかりやすく解説されており、バックナンバーを何冊か読んでみて、ある程度内容を理解することができましたが、教育現場で実践されている様子を見て、より深く理解することができたように思います。コラボレーションコモンズやライティングラボなどの取り組みや活動を見ていると、驚きとともに新鮮な気持ちにさせられます。先日も国立台湾大学の先生方が本学を訪問され、CTLの現場や施設をご覧になり、熱心に質問をされている様子を見て誇らしく思いました。

教育といえば、各学部のなかで完結するものであると認識されがちですが、CTLは大学全体の教育に関わる活動であり、今まさに大学に求められている最新の教育活動であることを発見しました。海外の大学と日本の大学との比較、グローバル人材を求める企業の姿勢等の報道で大学教育の中身がきびしく問われていますが、いざ改革を進めるとなると困難さが伴います。そんななかで、CTLの活動が心の支えとなり、仕事をしていくうえで力強い励みとなっています。これからも学生や先生方にとって有益で積極的な活動を続けていただき、本学にとって「希望の星」のような存在であってほしいと願う次第です。　**（廣）**

THINK × ACT
関西大学
KANSAI UNIVERSITY

関西大学 教育開発支援センター Kansai University Center for Teaching and Learning
〒564-8680 大阪府吹田市山手町3-3-35　TEL: 06-6368-1513　FAX: 06-6368-1514
http://www.kansai-u.ac.jp/ctl/index.html

発行日／2013年６月30日　編集・発行／関西大学教育開発支援センター